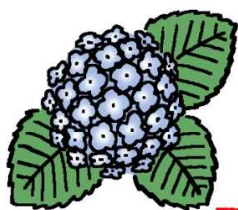


《人を知るといふこと》①

子どもたちの何を知ればよいのか

H29. 7. 3 坂井



先週、起きてはならない悲惨な出来事が報じられた。近隣の学校に通う生徒のことに、衝撃は大きい。身近な人を突然亡くす。それも、痛ましい形で。ご家族の心中はいかばかりか。一緒に通っていた子どもたちは大丈夫か。友人・知人、保護者、学校職員はどのようにこの時を過ごしてきているだろうか。

日々、子どもたちを迎えあいさつを交わし、研修会等に参加し、プール監視をしたりしながら、様々なことが脳裏をよぎる。これを読んでくださっている保護者の皆様も、職員もそれぞれの立場や関係性のなかで、この1週間を過ごしてきたのではないだろうか。

先週末、子どもたちをしっかりと見守りましょうと、教育委員会からも連絡があった。これ以上犠牲者を出してはいけない。金曜日には、緊急の職員朝会で職員の皆さんにもその内容を伝え、「子ども一人一人の様子をしっかりと見よう」と話した。さらに、「保護者と一層つながるとともに、教員として子どもたちを理解する力も、これから一層付けていこう。」このようなことも付け加えた。

教師には、様々な専門性が要求される。教科指導や生徒指導に関すること、学級をマネージすることなど様々ある。このようなときに、「目の前の子どもたちのことを知り、深く理解すること」が、学校職員が今最も目を向けなければならないことのように改めて思うようになった。響風では、これから何回かこのことについて考えていきたい。

ジョハリの窓

「人を知る」というときに思い浮かぶのは、「ジョハリの窓」のこと。心理学者ジョセフ・ルフト (Joseph Luft) とハリー・インガム (Harry Ingham) が発表した「対人関係における気づきのグラフモデル」だ。確かに、人は自分の本当の姿を分かってくれていないと思うことがある (秘密の窓)。逆に、他人だからこそ見える部分 (盲点の窓) もあるだろう。

(裏面に続く)

	自分に分かっている	自分に分かっていない
I 他人に分かっている	開放の窓 「公開された自己」 (open self)	盲点の窓 「自分は気がついていないものの、他人からは見られている自己」 (blind self)
III 他人に分かっていない	秘密の窓 「隠された自己」 (hidden self)	未知の窓 「誰からもまだ知られていない自己」 (unknown self)

金曜日に体力テストがあった。計測結果の数値自体は一応客観的な事実だから、自分も他人も共有できる（開放の窓）。しかし、取組方からは「意外な面」もあったのではないかと思う。「握力計を握るときの表情」や「友達が前屈するときの応援の様子」に、その子自身の一面や人との関係性など、おやっと思うことがある。子どもたちが本気になるときなどに、「未知の窓」（未知や可能性）が少し開かれるのでないだろうか。

「寄り添う」は、その子のそばにいることだけではない。その子の新たな姿を見付けようとするこゝも、「寄り添う」ことだと思ふ。そう言えば、好意を寄せる人ができると、その人のことをもっともっと知りたくなる。長年一緒にいる家族に対して、新たな面がまだあるはずだと思えるといいんだけど。

.....

子どもたちの命を守ることは、学校の基本的かつ最大の使命です。同時に、このことは子どもたちを取り巻くすべての大人が、力を合わせて取り組まなければならないことでもあります。この「響風」は、これまで住吉小の教職員に向けて発信してきた「校長通信」でした。子どもたちの命を守り健全な成長を図るうえで共通な情報の一つになればありがたい。そのような意図から、このたよりを住吉小学校の Web サイトで公開することにいたしました。月に2, 3回アップしますので、保護者や地域の皆様からお立ち寄りいただければ幸いです。

なお、Web サイトをご覧になる環境にない方やペーパーでも入手したい方は、学校の職員玄関付近に印刷したものを置いておきますので、どうぞお持ちください。

